

わたずく ニュース

I T A M I S H I K O N C H U K A N N E W S

第46号 2026/2

特集 伊丹の水生生物



特集

伊丹の

今回の特集は 2025 年秋開催の企画展「伊丹の自然」でスポットをあてた水生生物
タガメ、ミズカマキリ、ゲンゴロウ、トンボ(ヤゴ) などが該当し、これらは水生昆

伊丹の水辺と水生生物



猪名川(桑津橋下から上流を望む)

●伊丹の水辺(河川・池沼・水田)

周囲 5km 四方の小さな街、伊丹には山はありませんが、緑豊かな緑地や公園、池や河川敷があります。伊丹の水辺環境を見ると、市内には東端に猪名川、西端に武庫川という大きな川があります。そしてそれぞれの川に流れ込む駄六川や箕面川、天神川や天王寺川などの小さな川があります。猪名川と武庫川に挟まれた伊丹台地には、昆陽池をはじめ瑞ヶ



緑ヶ丘公園の下池(スイレンと赏月亭)

池、緑ヶ丘公園内の池、西池・黒池など灌漑用のため池を起源とする水辺、また市内にはわずかに残る水田もあります。

●伊丹の水生生物(魚・カメ・カエル・エビ・カニ・水生昆虫)

水生生物には水の流れがある河川が好きなもの、池や沼など水の流れがない止水が好きなものがあります。そして流れの速さ、水深、水底の質(泥、砂、石など)、水草や水際の植物などの有無などによって見かける水生生物も異なってきます。

2025 年秋の企画展「伊丹の自然」ではこれら伊丹の水辺にくらす多様な水生生物(プランクトンなどの小さな生き物や水生植物などを除く)を集め、その生体を数多く展示しました。展示生物は昆虫館スタッフだけでなく、伊丹市立伊丹高等学校生物部、兵庫県立伊丹西高等学校生物研究部、兵庫県立伊丹北高等学校自然科学部の皆さま、伊丹市昆虫館友の会会員の方、三田市有馬富士自然学習センターなどの団体や個人、施設に協力を頂き集めました。



昆虫館友の会行事「天神川の生き物観察会」の様子(写真:片山俊治)

伊丹の魚類

皆さんにとって身近な魚といえばなんでしょう?フナやコイ、ドジョウなどでしょうか?食卓にあがる海の魚やペットショップで売っている金魚などを思い浮かべる方もいるかも知れません。伊丹の水辺には環境省のレッドリストで絶滅危惧種に指定されているニホンウナギやメダカも生息しています。そして清流の象徴とも



オイカワ(生息場所:河川 食性:雑食 川の汚れに比較的強く近年生息数が増えている)

されるアユも見られます。川や池などで網を使って採集(ガサガサ)する、罠(もんどり)をしかける、あるいは釣りをするなど様々な手法を用いると意外と多くの魚種を観察することができます。



水際に生える植物の下を網でガサガサ中(写真:片山俊治)



ギンブナ(生息場所:池沼、河川 食性:雑食 オスは殆どおらず、無性生殖で増える)



コイ(生息場所:池沼、河川 食性:雑食 口元にヒゲがあることでフナと見分ける)

水生物

です。水生生物とは水中や水面などの水辺にくらす生きものたちのこと。昆虫でいえばアメンボ、虫とも称されます。ひろく動物に目を向けると魚、エビやカニ、カエルやカメ等が水生生物です。



カマツカ（生息場所：河川 食性：雑食 水底の砂などに体を隠していることが多い）



カワムツ（生息場所：河川 食性：雑食 オイカワに似るが、体側に紺色の線が入る）



タモロコ（生息場所：河川、池沼 食性：雑食 丸みのある頭と体側の黒い線が特徴）



モツゴ（生息場所：河川、池沼 食性：雑食 おちょぼ口が特徴で、別名クチボソ）



コウライニゴイ（生息場所：河川、池沼 食性：雑食 コイに似ていることから似鯉）



ムギソク（生息場所：河川 食性：雑食 口から尾の付け根まで伸びる黒い線が特徴）



ゴクラクハゼ（生息場所：河川 食性：雑食 全身にある青い小さな斑点模様が特徴）



カワヨシノボリ（生息場所：河川 食性：肉食 流れのある浅瀬の石の下などに生息）
写真：谷本卓弥（三田市有馬富士自然学習センター）



ドンコ（生息場所：河川 食性：肉食 大きな口で底生生物などを丸のみする）



ウキゴリ（ハゼ科 生息場所：河川、池沼 食性：肉食 中層に浮いていることが多い）



チヂビ（生息場所：河川 食性：雑食 メスが産んだ卵をオスが守る。ヌマチチブとは区別が難しい）



ドジョウ（生息場所：河川、水田 食性：雑食 口ヒゲで水底の有機物を探して食べる）



ミナミメダカ（生息場所：池沼、河川 食性：雑食 かつてメダカとされていた種はキタノメダカとミナミメダカに分かれた）



メナダ（生息場所：河川 食性：雑食 ポラによく似ている。河口から河川に入り中流域まで上ってくる）



カムルチー（生息場所：河川 食性：肉食 別名ライギョ（雷魚）とも呼ばれる外来種。蛇のような頭部と細長い体と豹柄の模様が特徴）



ニホンウナギ（生息場所：河川 食性：肉食 土用の丑の日に食されて来た人気の魚。絶滅が心配されている）



観察会で捕まえたナマズを触る子どもたち
（写真：片山俊治）



ナマズ（生息場所：池沼、河川 食性：肉食 細長い体、大きな口、立派な口ヒゲが特徴）

●特定外来生物

本来その地域には生息しておらず、人間活動によって他の地域から持ち込まれた生き物を外来生物と呼びます。その中で在来の生物を捕食したり生息場所を奪ったりして強い影響をもたらす生物は特定外来生物に指定され、販売や飼育、野外へ放つことなどが外来生物法という法律で禁止されています。伊丹の水辺環境にも特定外来生物が見られ、その動向には注意が必要です。



カダヤシ（原産地：北米 生息場所：河川、池沼 食性：雑食 メダカと似た生息環境を好み、肉食性が強く汚れにも強い。卵を産むメダカと違い、稚魚を産む卵胎生）



オオクチバス（原産地：北米 生息場所：河川、池沼 食性：肉食 旺盛な肉食性で在来の水生生物などを捕食する。ブラックバスの名で知られる）



ブルーギル（原産地：北米 生息場所：河川、池沼 食性：肉食 旺盛な肉食性で在来の魚類や甲殻類や水生昆虫などを捕食する）

伊丹のハ虫類（水生）



スッポン（生息場所：河川、池沼 食性：雑食 硬い甲羅を持たないカメ。長い首と尖った鼻が特徴、大きく発達した水かきのついた足で上手に泳ぐ）

水生の身近なハ虫類といえばカメの仲間です。よく見られるのはミシシippアカミミガメという外来種です。ミドリガメの愛称でペットとして親しまれましたが、飼育できなくなったものが野外に放され定着しています。昆陽池では在来の一ホンイシガメやスッポン、外来種のクサガメなども観察できます。



ニホンイシガメ（生息場所：河川、池沼 食性：雑食 日本固有種、日本各地で減少している）



クサガメ（生息場所：河川、池沼 食性：雑食 中国からの移入種とされる。名前の由来は臭いカメで、独特の匂いがする）



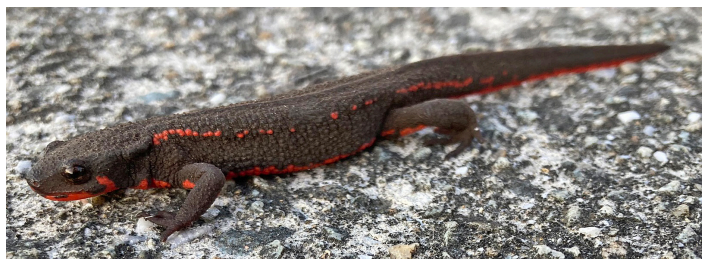
ミシシippアカミミガメ（原産地：北米 生息場所：河川、池沼 食性：雑食 目の後の耳周辺が赤いのが名前の由来。条件付特定外来生物に指定されている*）



スッポンの産卵（親ガメは産卵のために上陸し水辺の土を掘って卵を産み、土をかけて埋める）

*条件付き特定外来生物・・・特定外来生物と同様に在来の生物に強い影響をもつとされる。野外のものを採集し飼育することはできるが、採集したものを移動させたり、飼育したものを再び野外へ放すこと、販売することなどが外来生物法で禁止されている

伊丹の両生類



アカハライモリ（生息場所：河川、池沼、水田 食性：肉食 背中黒色でざらつき、腹は鮮やかなオレンジ色）

市内にわずかに残されている水田。田植えが近づき水が入る時期には一斉にニホンアマガエルが鳴き出します。水田の他に池や河川敷でよく見かけなのがヌマガエル。かつては普通種だったトノサマガエル、アカハライモリはほぼ見られなくなりました。アメリカザリガニと共に大きなオタマジャクシで親しまれたウシガエルは特定外来生物に指定されています。



ニホンアマガエル（生息場所：水田 食性：肉食 緑色から茶褐色まで体色や模様は様々。一つの鳴のうを膨らませ鳴く）



ヌマガエル（生息場所：河川、池沼、水田 食性：肉食 現在伊丹でもっとも普通に見られる）



トノサマガエル（生息場所：河川、池沼、水田 食性：肉食 現在伊丹では殆ど見られない）



ナゴヤダマガエル（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 伊丹市では消滅したとされていたが、昆陽池にて再発見された）



ウシガエル（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 かつて食用として輸入され逃げ出したものが定着。旺盛な肉食性が在来の生物に悪影響を与えるため特定外来生物に指定される。牛のような鳴き声から名がついた）

伊丹の甲殻類

伊丹市内各所に生息し、かつては大人から子どもまで親しまれてきたアメリカザリガニは条件付特定外来生物に指定されています。水田環境で見られるカブトエビの仲間、小さな湧水などに暮らすサワガニ、池や川の淀みに生息し長く立派なハサミを持つテナガエビなどはあまり見かけなくなりました。



テナガエビ（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 オスには長いハサミ（鉗脚）があり、名前の由来にもなっている）



スジエビ（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 市内の水辺でよく見かける。透明な体にスジが入る）



ヌマエビの仲間（生息場所：河川、池沼 食性：雑食 市内の水辺でよく見かける。在来種のミナミヌマエビと、近縁の外来種などの判別は難しい）



アメリカザリガニ（生息場所：池沼、河川 食性：雑食 在来の生物に強い影響をもつため、条件付特定外来生物に指定される）



サワガニ（生息場所：湧水、溪流 食性：雑食 比較的きれいな沢などにくらす。日本で唯一、淡水で一生涯を過ごすカニ）



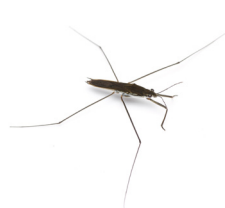
モクズガニ（生息場所：河口～河川上流域 食性：雑食 ハサミに藻のような毛を生やした大型のカニ、親ガニは産卵のために河口に降り、稚ガニは川を遡上しながら成長する）

伊丹の水生昆虫



タイコウチ（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 獲物を捕まえる前脚を太鼓を打つように動かす様子が名の由来）

水生昆虫の花形といえばゲンゴロウやタガメかも知れませんが、そうした大型の水生昆虫は伊丹には生息していません。市内で最も身近な水生昆虫はアメンボやトンボのヤゴなどではないでしょうか。ゲンゴロウの仲間ではハイロゲンゴロウ、タガメの仲間ではコオイムシやタイコウチなどが確認できます。かつては学校のプールなどにも飛来していたミズカマキリはほとんど見かけなくなっています。またかつては市内の河川や水田などで見られ、幼虫は水中で暮らすヘイケボタルやゲンジボタルなども野生の姿を見かけることはほとんどなくなりました。



アメンボ（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 水面に浮かんで暮らし、落ちてきた小さな生き物を食べる）



コオイムシ（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 メスがオスの背中に産卵し、オスはフ化まで背負ってくらす）



マツモムシ（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 水面下に腹部腹面を向けてくらす。英名バックスイマー）



ミズカマキリ（生息場所：河川、池沼 食性：肉食 水中に生活し、カマキリのような姿を持つことから名がついた）



ハイロゲンゴロウ（生息場所：河川、池沼、食性：肉食 街中のプールや水たまりなどにも見られる。よく飛翔して水場を移動する）



左：ギンヤンマのヤゴ（生息場所：池沼、河川 食性：肉食 学校のプール清掃などでも見つかる大型のヤゴ、水中の小さな生き物を捕まえて食べる）右：成虫



多様な生き物が暮らす伊丹の水辺いつまでも

今回ご紹介した様々な生き物たちが暮らす伊丹の水辺、大きな森や山がない伊丹では河川や公園の水辺、周囲のみどりがとても



小さな魚を捕まえたカワセミ



スジエビを捕食中のタイコウチ

貴重な自然環境となっています。水辺の植物たちは多様な動物たちの生息場所を作りだし、動物たちの餌資源ともなります。またプランクトンなどの小さな生き物から始まる食物連鎖を通して、魚やカエル、エビなどの水生生物が育まれ、それらたくさんの水生生物は野鳥の命も支えています。浅瀬でじっと待ち伏せしエビや魚を捕まえるサギの仲間、目の醒めるような青い体で水中へ飛び込み狩りをするカワセミ、昆陽池公園には近年コウノトリが飛来しカエルや魚を食べる姿が観察されるようになりました。こうした生き物たちの様子を観察し記録に残し、広く普及し、そして見守りながら命あふれる豊かな水辺を後世に残せていけたらと思います。（野本康太）

「さいきんの

フサヒゲサシガメを 36 年ぶりに再発見

フサヒゲサシガメはサシガメ科に分類され、触角や脚に長い毛を密生する珍妙な姿をした体長 5 mm ほどのカメムシです。かつては西日本でひろくみられる昆虫であったようですが、1989 年に岡山県で採集された 1 個体（渡辺，2001）のあとには記録が途絶え、環境省版レッドリスト（2020）では絶滅危惧Ⅱ類（VU）に選定されています。絶滅が心配されるいっぽうで、本種は X（旧 Twitter）などの SNS で写真が投稿される事例が近年にいくつかありましたが、いずれもその詳細は不明のままでした。

このたび、山梨県笛吹市で 2025 年 5 月 16 日に生きた本種のメス 1 個体が採集されました。採集した齊木亮太学芸員（石川



採集されたフサヒゲサシガメの生きた個体 撮影：渡部晃平さん（石川県ふれあい昆虫館）

県ふれあい昆虫館）を含む、渡部晃平学芸員（石川県ふれあい昆虫館）、小松 貴博士（つくば市）および筆者による研究チームは、本種の 36 年ぶりの再発見を論文にまとめ、日本昆虫分類学会の会誌上で公表することができました（Watanabe et al., 2025）。

本種はアリを専門的に捕食する好蟻性昆虫とされ、オオズアリを捕食対象とした可能性について書かれた文献があります（行徳，1960、菊原，2014）。今回採集した個体でも、10 種のアリを与える観察実験を行いました。捕食行動を確認することはできず、オオズアリには明確な拒否反応を示しました。条件を変えて実験を続けたいところでしたが、フサヒゲサシガメが死んでしまい、残念ながら中止となってしまいました。

全国のカメムシ研究者が血眼になって長年探し続けた本種の再発見の喜びと安心にひたりつつ、未だ謎に包まれたままの生態の解明など、さらなる研究への期待に胸を熱くしています。

（長島聖大）

引用文献：

行徳直巳 1960. フサヒゲサシガメについて．昆虫，28 (1): 56.

菊原勇作 2014. フサヒゲサシガメ．レッドデータブック愛媛 2014.

渡辺昭彦 2001. 岡山県内で採集された注目すべき昆虫．すずむし，(136): 82.

Watanabe K., Saiki R., Nagashima S., Komatsu T. 2025. Rediscovery of *Ptilocerus immitis* Uhler, 1896 (Hemiptera: Reduviidae) from Japan. Japanese Journal of Systematic Entomology, 31: 260–261.

2025 年夏、オオゴマダラがふ化しない!?

オオゴマダラはチョウ温室内のホウライカガミという食草に、毎日 30 個以上、多いときには 100 個以上産卵します。たくさんの卵を産卵しているにも関わらず、2025 年 8 月 20 日ごろから、ふ化率がどんどん下がってきました。ついに 8 月 22 日はふ化幼虫がたった 3 匹だけとなりました。その後 9 月 4 日までの約 2 週間にわたり、ふ化幼虫がゼロという日が続いたのです。こんなことは始めてです。しかもオオゴマダラだけで、他のチョウには見られない現象でした。

ふ化しない卵を観察すると、卵寄生蜂は見当たらず、卵がつぶれたり、カビが生えたりしていました。暑さのせいで無精卵かな？高温障害かな？と考えていました。ただチョウ温室にはたくさんのオオゴマダラの成虫が飛んでいたのも、暑さが落ち着いたらまたふ化するだろうとしばらく様子を見ていました。案の定、9 月 6 日ごろからふ化が再開したのです。

ふ化が 2 週間も止まると、飼育している幼虫の数や成長段階に

波がでたり、展示やふれあい体験で来館者に見てもらおうことができなくなります。2026 年の夏は早めに対策をしようと、「成虫を涼しい部屋で飼育する」、「卵を冷やしてふ化を遅らせる」、などなど…今から考え中です。（角正美雪）



オオゴマダラのふ化幼虫（卵殻を食べているところ）

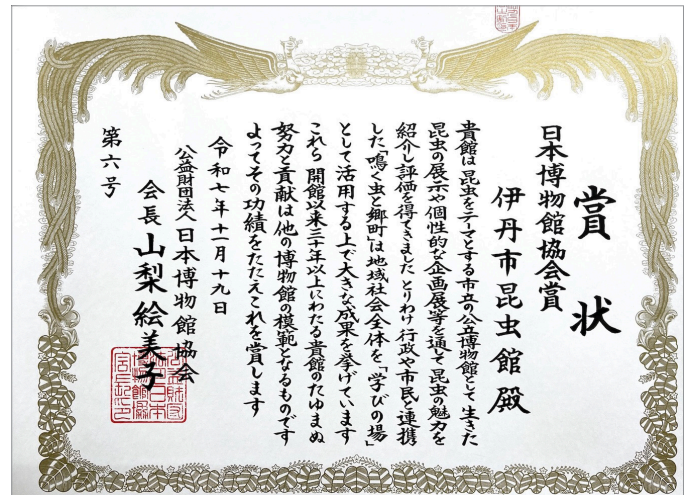
飼育室から

日本博物館協会賞を受賞しました

2025 年 11 月 19 日に大阪市中央公会堂で開催された全国博物館大会にて、当館が第 6 回日本博物館協会賞を受賞しました。この賞は日本の博物館の振興に大きく貢献し、他の博物館の模範となる顕著な成果を挙げている国内の施設を顕彰する賞です。約 1100 ある美術館や動物園などあらゆる分野の会員館から選ばれ、当館が今年度の受賞施設となりました。

受賞理由として、開館以来 30 年以上にわたり生きた昆虫や標本の展示をはじめ、体験型の特別展や個性的な企画展を数多く開催し昆虫の魅力を紹介してきたこと。「鳴く虫と郷町」での取り組みなどにより、地域社会全体を巻き込んだ「学びの場」の形成に加え、市民のみなさまに地域の良さを再認識してもらうことに貢献していること。基本的な博物館活動を着実に実践してきて、博物館学研究における貢献もあること、などが挙げられました。

この賞は、当館を利用して楽しんでもらっている方々や支えて共に活動してくださっている地域の方々など、みんなで手にした成果です。みなさまに御礼申し上げますと共に、今後も活動の充実をはかり、より多くの方々に親しまれるよう努力していきます。引き続き、よろしくお願い申し上げます。(坂本昇)



授賞式の様子（撮影：奥山清市）

空港の生き物調査をおこないました

大阪国際空港は伊丹市と大阪府豊中市の境にあり、敷地の 7 割は伊丹市域です。滑走路のまわりは広い草原で、都市部の大切な緑地になっています。伊丹市昆虫館では関西エアポート株式会社の協力のもと、この草原の動植物調査を行いました。



調査風景



シオカラトンボ



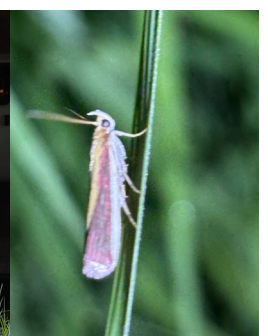
ショウリョウバッタ

た。調査は昼間と夜間の 2 回行いました。

調査の結果、生息地が減ってきているシルピアシジミ(環境省レッドリスト絶滅危惧ⅠB 類)だけでなく、市内の他の場所では見かけないショウリョウバッタモドキのほか、植物ではツルボ、ムラサキツメクサ、ヒメジョオンなどが確認できました。植物の多くは外来種ですが、定期的な草刈りで管理された背の低い草地は、さまざまな生物が息づいていました。(前畑真実)



調査風景



アカマダラメイガ

生物多様性講演会

「虫って食べられるの？私が食べた虫」

開催中の企画展「昆虫食～これうまいでえ」にあわせ、昆虫食文化をテーマにした講演会を開催します。講演者である立教大学教授の野中健一さんは、日本を代表する昆虫食文化の専門家であり、企画展の監修者です。日本はもちろん東南アジアのラオスや南アフリカなど世界各地へフィールドワークに出かけ、昆虫食文化の研究の傍ら様々な昆虫を食べてこられました。そのご経験から、昆虫の捕り方、食べ方や味の紹介など、世界と日本の昆虫食文化について詳しく楽しくお話しいただきます。どうぞご参加ください。

(坂本昇)



南アフリカの虫屋台

【開催概要】

日時 2026年3月1日(日) 13:00-14:30 (開場 12:40)

会場 東り いたみホール 6階 中ホール *昆虫館ではありません

申込 不要、直接会場までお越しください

定員 120名 *試食はありません

費用 無料

もよおしあんない

*展示・行事は、日程・内容等を変更することがあります。最新情報はウェブサイトをご確認ください。

2月

- 14(土) 企画展関連トーク&試食会
「ハチの子の食文化のひみつ、見つけた!」
(予約不要・当日 11:00 から整理券配布)
- 15(日) 第2回こやいけ野鳥観察会(要予約)
- 21(土) 猪名川クリーン作戦(予約不要)

3月

- 21(土) 企画展関連トーク&試食会
「虫を食べものにする～信州、伊那の佃煮屋さん」
(予約不要・当日 11:00 から整理券配布)
- 28(土) 学芸スタッフトークショー(予約不要)
角正学芸員の「むしむしクイズ大会」

企画展

1/24 - 4/13 昆虫食～これうまいでえ

プチ展示

12/17 - 3/2 身近な自然絵はがき 2025 作品展
3/4 - 3/30 友の会活動紹介

行事の申込方法

観察会や講座等の行事の一覧は、右のQRコードからウェブページをごらんください。予約申込制の行事は、ウェブ上からお申し込みを受け付けております。往復はがき・FAX での申し込みをする方は、以下の要項を書いてお送りください。

1. 行事の名称
2. お申し込みの方全員(同伴含む)の氏名、ふりがな
3. 年齢(こどもは学年)
4. 電話番号
5. おすまいの市町村
6. 返信用の FAX 番号(FAX がある場合)
(コンビニの送信サービスのような返信の受けられない FAX 番号は不可)

往復はがき: 〒664-0015 兵庫県伊丹市昆陽池 3-1 伊丹市昆虫館
FAX: 072-785-2306



行事一覧・申し込みのウェブページ

ことば蔵 × 市内郵便局 × 昆虫館コラボ企画

誰かに伝えたい「身近な自然絵はがき」2025 結果発表!



表彰式の様子(写真:ことば蔵)

全国から 384 点の作品が集まり、審査の結果、伊丹ロータリークラブ賞・イオンモール伊丹賞・TOYO TIRE 賞・身近な自然賞・伊丹市内郵便局賞・伊丹市昆虫館賞・ことば蔵賞が決定。11月2日に表彰セレモニーを行いました。審査ポイントは、「身近な自然が生き生き、のびのびと表現されていること」。今年も素敵な作品が集まりました。次回もお楽しみに!

(西史夏・野本康太)



受賞作品の一覧

編集スタッフより

当館で昆虫食の企画展を開催するのは 11 年ぶり 3 回目です。どうぞお越しください(さかもと)

いもむし・けむしの企画展開催を目指し、色々と構想を練っています(まえはた)

次回(第 47 号)発行は、2026(令和 8)年 7 月頃の予定です。

表紙写真 伊丹市内で採集した魚たち(野本 康太 撮影)

いたこんニュース 第 46 号 Vol.23 No.2 (通巻 46 号)
2026(令和 8)年 2 月発行
発行 伊丹市昆虫館
〒664-0015 兵庫県伊丹市昆陽池 3-1 昆陽池公園内
TEL: 072-785-3582 FAX: 072-785-2306
URL: <https://www.itakon.com/>
E-mail: itakon@itakon.com

編集 前畑真実・坂本 昇
デザイン原案 pico pictures
印刷 アイシー印刷株式会社